

縄文時代研究と神奈川

山本暉久

いまさらいうまでもないことだが、縄文時代文化研究の歴史を振り返ると、神奈川が果たしてきた役割の大きさに気づく。とりわけ、岡本 勇先生が神奈川の地で残した数多くの業績が、縄文時代文化研究の発展に大きな影響力を与えたことは誰も否定はしない。

このようなことを、なぜ書いているのかというと、昨年12月に、横須賀市教育委員会の野内秀明さんや盤古堂の小池聡さん、山田仁和さんたちのご厚意で、現在、横須賀市教育委員会で再整理が進められている、岡本勇先生が調査された吉井城山第一貝塚の出土資料を、私が所属している縄文時代文化研究会の仲間たちと見学したさいに、そのことをあらためて痛感したからである。

岡本先生は、南関東の早期縄文式土器編年の確立を目指して、三浦半島の遺跡調査を継続して行ったことで知られている。自分の書架の片隅に、もう色あせてしまった黄色い表紙の『横須賀市博物館研究報告(人文科学)』のシリーズがある。昭和32(1957)年3月に刊行された「茅山貝塚」の報告が掲載された第1号は残念ながら、コピーしかないが、第2号の「平根山遺跡」(1958.3)、第3号の「馬の背山遺跡」(1959.3)、第4号の「大浦山遺跡」(1960.3)、第5号の「鵜ガ島台遺跡」(1961.3)、第6号の「吉井城山第一貝塚(一)」(1962.3)、第7号の「吉井城山第一貝塚(二)」(1963.3)と続く一連の遺跡報告は、今、手にとってみてもまさに圧巻である。

わたしが、考古学を志して大学に入学したのが、東京オリンピックの翌年の昭和40(1965)年4月だから、これらの一連の報告の刊行は大学入学前になされていたものであった。考古学を学びたてのわたしは、考古学関連の研究雑誌や調査報告書を集めることに喜びを感じて(今は、家にも職場にもあふれかえる書籍の山に辟易しているが)、金もないのに夢中で集め始めていた。そして、そのころ購入した考古学関連の書籍には、必ず、裏表紙に入手した日付を書いていた。

その日付は2号～7号までのすべてに「651116」と記されている。それは1965年の11月16日のことだ。直接横須賀市博物館に買いに出かけたのか、あるいは、郵便で注文したのか、もう40年あまりも前のことなので、すっかり記憶が失せてしまったが、奥付にある価格はいずれも「頒価100円」とあるから、総額600円払って購入したことになる。当時としてもずいぶんと廉価だった。

自分が考古学の道に進もうと思ったきっかけは、高校2年生であった、昭和38(1963)年1月に、池袋の西武デパートで開催された「日本のあけぼの展」という旧石器から縄文時代の展覧会を見たことだった。それで大学では縄文時代を勉強しようと、はりきってはいたが、それこそ何も知らない、とくに縄文式土器型式編年には全くの無知で、これではいけないと勉強しはじめたのが、そのころであった。だから恥ずかしいというか、あまり人にお見せできないのは、この横須賀市博物館研究

報告も、下手な字の書き込みだらけで、しかも、鉛筆でなくペンで書き込んでいるので、古書的な価値はゼロに等しい。もっとも、将来古書として価値が出そうだからと手に入れたわけではないが、今思うと、もったいないことをしたと思う。大学生時代の考古学関連書籍の多くは、そんな調子の書き込みだらけのものが多く、1965年に刊行された河出書房の『日本の考古学』Ⅱ(縄文時代)も同様で、岡本 勇先生と戸沢充則先生の共著になる「関東」の項はなんども読み返したものだ。

だから、この本はぼろぼろで、仕方がないので最近古本屋で全巻をあらためて一万円ほどで購入しなおした。話しは脱線するが、最近は古書購入も便利になって、神田やそこの古本屋巡りなどする必要もなく、ネットで日本最大の古本屋サイトと称している「日本の古本屋」というサイトを開いて、探求書を検索すると、このネットに登録している古本屋が扱っている場合、たちどころに値段とともにリストアップされるので、そこで一番安い値段を付けている古本屋に注文すれば、居ながらにして探求書を入手できる。便利な世の中になったものだ。ぜひ皆様にもお勧めしたい。ちなみに、『横須賀市博物館研究報告』のお値段をみると、考古学書籍を扱うことで有名な某古本屋がヒットして、『自然科学1-8』と『人文科学1-7』が抱き合わせであるが、15冊で2万8千円であった。これはやはり高い。なお、ちなみに考古学関係で私が探求書を検索したさい、ヒット率の高いのは、なんとといっても「第一書房」である。その分厚い古書目録などでも想像されるのだが、とにかくいまどき良くこんなに集めているなあと感じてしまうくらいだ。

というような関係ない互太話で恐縮するが、話しを元にもどすと、吉井城山第一貝塚の資料を見学したさいに、驚いたのは、その資料の豊富さであった。『横須賀市博物館研究報告(人文科学)』第6号に岡本 勇先生が執筆された「横須賀市吉井城山第一貝塚の土器(一)―茅山上層式土器とそ

の周辺―」には、「われわれは吉井第一貝塚の大半を発掘し、膨大な資料をえた。下部貝層からは、じつに二万点にたつする土器が採集されたが、これは一つの貝塚に含まれる土器のすべてではなかったとしても、それに近いものであったことは疑いない。そのほとんどは、茅山上層式ないしそれに併行するものであり、底部の破片から推すと個体数は二百数十にたつする。これらの資料をえて、茅山上層式の内容はきわめて明らかとなった」(同書中、40頁)と、記されているが、その実感は資料に直接触れてはじめて体感できるものだろう。

報告書だけでは、その質量感がなかなか伝わってこない。だからおのずと掲図された実測図や拓影図の土器紋様に目がいつてしまう傾向がある。やはり、資料は実見してなんぼのもんだと、あらためて思ったのであった。

わたしは、岡本先生の三浦半島での一連の発掘とその研究報告に多くのことを学んできた。縄文早期に限っても、岡本先生が『日本の考古学』で提起された、「尖底土器の終焉」、「上昇期」という歴史的な段階区分、あるいは、茅山上層式以降の土器編年に関する先駆的な業績は、のちに、海老名市上浜田遺跡での調査と報告書作成を通じて大いに生かされることになったし、その成果が、1983年12月に神奈川考古同人会縄文研究グループが主催したシンポジウム「縄文時代早期末・前期初頭の諸問題」として結実することになる。

このシンポジウムには、岡本先生からは記念講演「茅山上層式とその周辺」(その記録は、『神奈川考古』第18号に収録)をいただいたことも、懐かしい思い出である。

岡本先生をはじめとする神奈川における先駆的な業績を学び、これからも縄文時代研究を神奈川の地で発展させていきたいと思う。

神奈川県考古学会「連絡誌」に一文を執筆せよとのことで、筆をとったが、このような私事めいた雑文しか書けず、おゆるし願いたい。

平成16年度考古学講座「神奈川の横穴墓」に参加して

春日牧人

去る平成17年2月6日（日）神奈川県民センターに於いて、神奈川県考古学会の主催により平成16年度考古学講座「神奈川の横穴墓」が開催されました。未だ厳しい寒さの残る一日でしたが、多数の参加者がありました。

今回の講座は、7名の口頭発表と1名の紙上発表、それにミニシンポジウムという構成でした。当日の進行は、寺田兼方会長の開会挨拶に始まり、講座全体の趣旨説明の後、午前中に3名の発表、午後には4名の発表があり、その後ミニシンポジウムが行われ、伊東秀吉副会長による挨拶で閉会されました。

各発表内容についてまとめると、午前中にはまず、かながわ考古学財団の上田 薫さんが「学史神奈川の横穴墓」と題して、神奈川県に於ける横穴墓研究の流れをまとめられました。当日の資料では、1797（寛政9年）に『東海道名所図会』に横浜市西区の浅間神社付近の横穴墓が人穴として図入りで掲載されたことを先駆けとして、赤星直忠博士の研究を経て、神奈川県考古学会による平成6年度入門考古学講座「横穴墓とは何か」の開催、1995（平成7年）から2002（平成14年）のかながわ考古学財団の古墳時代研究プロジェクトによる「横穴墓の研究(1)～(8)」にいたるまでの研究の歩みを年表に整理して提示されました。

次に、県立鎌倉高校の長谷川厚さんは「横穴墓と地域社会」と題して、地域社会に於ける横穴墓の歴史的意義という観点から県内の横穴墓の構造、形態を検証し、いわゆる高塚古墳との関連も視野に入れつつその分布と変遷について論じられました。大きくは横穴墓の導入を政治的な理由による石室構築技術を持つ専門工人の多摩川流域からの移動によるとし、構築技術の在地化によってその構造、形態に形骸化、省力化が起こるという流れ

を提示されました。また7世紀前後には県南部の海岸地帯を中心に東海地方から新たな構築技術の導入があった可能性も指摘され、高塚古墳も含めた当時の墓制の様相が選択的で柔軟なものであり、地域社会に於ける横穴墓の受容が単純で一元的なものではないことを強調され、地域社会に於ける横穴墓の歴史的意義について列島規模での歴史的な動きのなかでの地域社会の動きが反映されたものであるとまとめられました。

また相模考古学研究所の田村良照さんは「県内横穴墓の出現と終焉」と題して、横穴墓の出現と終焉の年代を中心にその系譜についても論じられました。出現期については、6世紀後葉を想定される一方で横浜市青葉区上谷本横穴墓群を最古例としてあげ、その類例が家形天井の形態から5世紀末～6世紀初頭の北九州の竹並横穴墓群や上ノ原横穴墓群に求められる可能性を指摘されました。5世紀末～6世紀初頭という年代は全国的にも最古級にあたり、県内の横穴墓の上限をおおむね6世紀後葉にあてる状況ではその歴史的意義を慎重に検討する必要があると思われ、興味深いものです。終焉期については8世紀中葉までにその造営を終了するとされ、規模の面では縮小、副葬品の面では700年ごろを画期として後期古墳文化の象徴である装身具、武器、馬具などが姿を消すことを述べられ、葬送儀礼の質的転換を指摘されました。

午後からはまず、東京都埋蔵文化財センターの鶴間正昭さんが「横穴墓出土の土器」と題して、横穴墓の年代観を決める上で重要な柱となる土器について、主に7世紀～後半以降に県内に大量供給された湖西産須恵器の編年研究の概要と問題点をまとめられ、在地の土器編年に立脚した東海産須恵器編年の検討、また横穴墓出土土器の問題に関して、出土状態を吟味して同一時期の副葬による共伴関係を見極めること、複眼的な視点に立った出土状態の分析を通じて土器研究にも有益な情報を蓄積していくことの必要性を指摘されました。

次に村田文夫さんからは「横穴墓と火葬墓」と題して、被葬者、葬制の問題を中心にお話しをしていただきました。渡来人との関連で語られることの多い横穴墓ですが、その被葬者、葬制については考古学では解明することの難しい問題と言えます。横穴墓、火葬墓に見られる渡来系の要素をあげ、一方でこれに対して大分県上ノ原横穴墓群出土人骨が形質人類学的分析によると朝鮮半島からの渡来人とは言えない、という例も示され、一つの要素のみに着目して被葬者像を推測することの危険性と、形質人類学や文献史学との総合的な検証の必要性を強調されました。また日向横穴墓群と日向古墳の例から考えられる墳丘横穴墓という形態からは、横穴墓の系譜に関する新たな可能性が提示されたということができるといえるでしょう。

また、かながわ考古学財団の柏木善治さんは「横穴墓の線刻画」と題して、神奈川県内の線刻画を紹介されました。線刻画が仏教受容後の葬送観念の一端を示すもの、特に葬制における火葬への変化、古墳から寺院への変化という、地域社会へ仏教が浸透していく過程に対する一側面のみからの理解に新たな一石を投じるものと位置付けられました。今回柏木さんが作成された線刻画の集成資料は圧巻で、今後の研究上、大変価値のあるものと思われま

す。最後の発表者である、かながわ考古学財団の須藤智夫さんは、「相模の古墳・横穴墓と古代氏族」と題して、文献史料上にみられる氏族と、県内の高塚古墳、横穴墓の被葬者との比定をされました。これは非常に魅力的かつ、困難な課題であったと言えます。県内には渡来系氏族の存在した可能性が多く指摘され、横穴墓の伝播、造営のみならず、渡来系氏族の実態をどのように捉えるかによっては、神奈川県の地域的特性の理解は大きく変わることが考えられるからです。

また、紙上発表として立正大学の池上 悟さんからは「神奈川の横穴墓の様相」と題して、横穴墓研究の動向と問題点についてのまとめと、かな

がわ考古学財団の古墳時代研究プロジェクトの成果に基づき、横穴墓の展開期である7世紀に神奈川県下で特徴的な棺室横穴墓について集成、分析をされています。

すべての発表が終了した後、これらの発表者の方々に平塚市博物館の明石 新さんを加えてミニシンポジウムが行われました。ここでは主に横穴墓の年代、類型とその系譜の問題が話し合われました。

神奈川県は全国的に見ても横穴墓の集中地帯であり、地域的な特徴となっています。それがどのような歴史的意味を持つのかという研究は、旧相模国・武蔵国にあたる神奈川県という地域が当時どのように位置付けられていたのかという、地域史の解明に重要であるのみならず、横穴墓の盛行する7世紀は古代国家の成立という、非常に大きな課題をはらむ時代で、日本古代史全体の研究にとっても重要なものと言えるでしょう。今回の考古学講座において、その研究の最前線で活躍される方々が集まり意見をぶつけ合わせたことは、大きな意味を持つと思います。

しかし一方で、当日の会場に集まる方々に年齢的、文化的な偏りがあることも感じられました。このような催しに考古学関係者に限らず一般の方々がより多く参加されるように働きかけていくこと、考古学の成果を広く一般に広めていくことは、地域社会に貢献するための考古学研究者の非常に大きな課題であるのでありますが、その困難さをあらためて考えさせられました。

お知らせ

平成16年度考古学講座「神奈川の横穴墓」のレジュメは、まだ若干残部があります。ご希望の方は平成16年度考古学講座「神奈川の横穴墓」のレジュメ希望の旨を明記の上、郵便振替でお申し込み下さい。代金は会員の方が1部400円、非会員の方は1200円になります。また送料は全国一律210円です。

加入者名 神奈川県考古学会

番 号 00240-9-71208

山北町の自然と文化財を訪ねて

安藤文一

はじめに

「平成の大合併」で変わることもあるが、山北町の面積は約224km²と県内では横浜市に次ぐ広さを誇っているが、山地率は約90%で居住地域がかなり制約されている。その反面自然は豊富で、春夏秋冬様々な楽しみを求めて多くの登山・温泉客やハイカーらが西丹沢から中川温泉あるいは酒水の滝周辺を散策する姿を見かける。ここでは、都会にない素朴な自然景観とともに山北町の誇る文化財を訪ね歩くコースを紹介しながら、そのポイントを解説しておきたい。

山北駅周辺（山北・岸地区）のなかでは、県指定史跡「河村城跡」を中心に全国名水百選、日本の滝百選、かながわの景勝百選「酒水の滝」をめぐるコースは多少険しい山道の所もあるが老若男女誰でも楽しめる場所である。

河村城跡は、平安時代末期に河村郷を支配した波多野氏一族の河村氏に始まると伝承されているが、古文献からすると南北朝時代の新田義興・脇屋義治らの籠城戦（1352）が名高く、室町時代は関東管領の上杉氏あるいは駿東から勢力を伸ばした大森氏の持城となり、戦国時代は小田原北条氏の支城として武田氏に対する重要な拠点として機能していたものである。山頂郭部の遺存状態は良好で、約8万m²という指定範囲からしても関東有

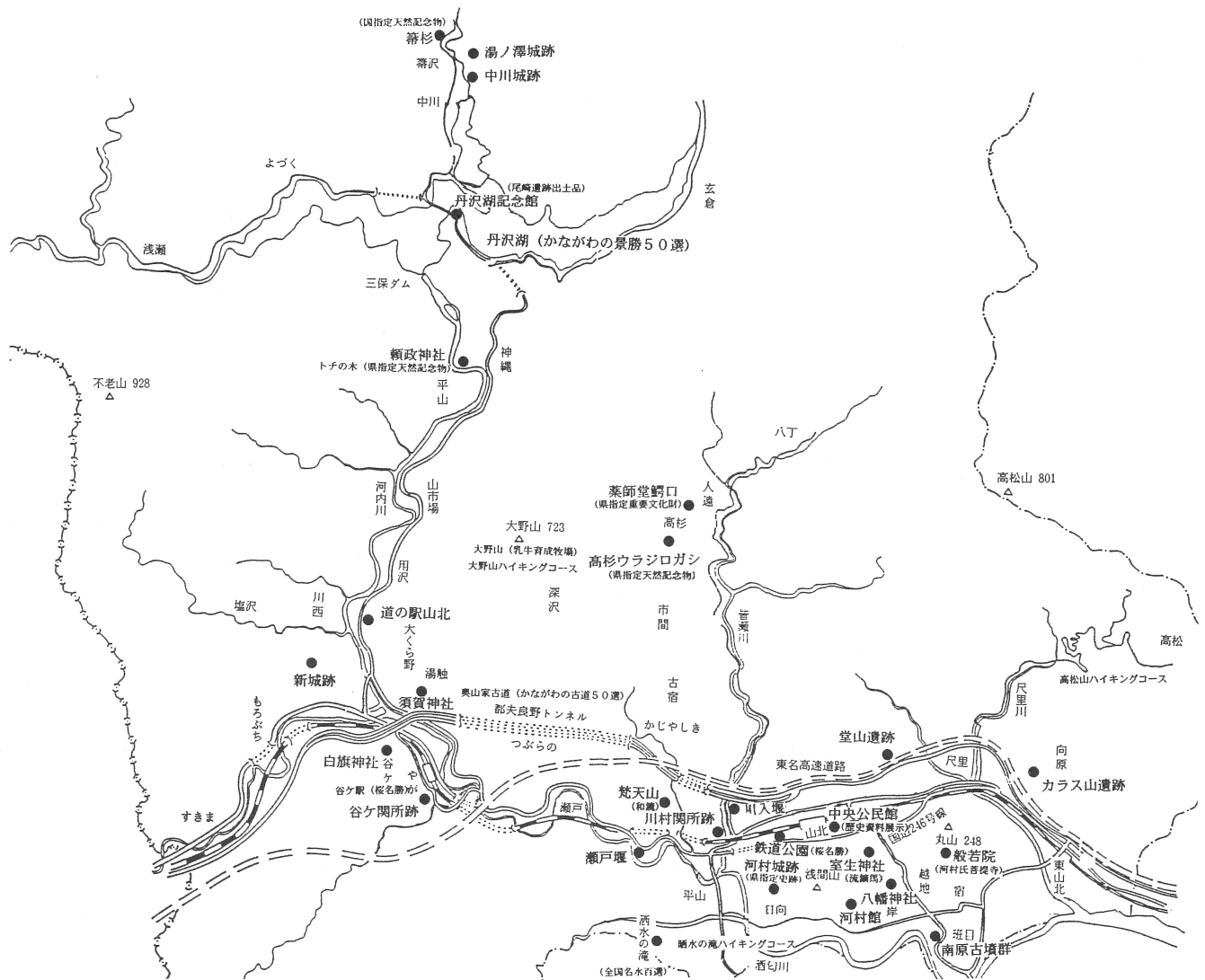


図1 山北町内の文化財位置図

数の山城と言っても過言ではない。

現在、平成15・16年度に実施された試掘調査の成果をもとに公園整備計画が進捗しており、平成17年度から一部の整備工事に入る予定であるが、写2のように堀切3では大規模な橋脚遺構が確認されており、他にも古絵図にはない空堀・堅堀や段切腰郭等多くの城郭遺構が検出されている。

なお、既に「河村城址歴史公園」は開園しており、小郭両側の畝堀（障子堀）は一見の価値があるだろう。付近には湧水点であるお姫井戸も見られるが、冬場は水量が少なく生の飲料には不向きかもしれない。平坦面が芝張りされた本城郭東側斜面にはトイレ・飲料水も新たに完備されている。

ここから日向を通過して酒水の滝に下るのが普通であるが、一寸足をのぼして浅間山農道を利用して歩くと、途中足柄平野を一望できるビューポイントに出会う。麓は河村氏が平安時代以降に居住したと推定されている「河村館」になる。丸山の麓まで来ると、河村氏の菩提寺で県指定天然記念物のヒキガエル集合地がある「般若院」、クスノ



写1 河村城跡遠景（南西より）



写2 河村城跡・堀切3橋脚遺構
(山北町教育委員会提供)

キの老木がある「八幡神社」、県指定無形文化財の流鏑馬が毎年11月3日の祭礼に行なわれる「室生神社」、6世紀後葉から7世紀初頭に築造された南原古墳群も見ることができる。

山北駅周辺（山北・向原）では、弥生時代中期初頭の条痕文系土器の標識遺跡になる「堂山遺跡」があるが、現在は東名高速道路になっており、遺跡の一部が蜜柑畑としてわずかに残っているだけである。堂山の山麓には山北中学校遺跡もあるが、これは出土した鎌倉時代後期から室町時代初頭の中世石塔群が隣接する種徳寺境内に集められており、現地には何の痕跡もない。ただ、これらの出土遺物については尾崎遺跡や南原古墳群も含めて中央公民館の2階展示コーナーに常設展示されているので立ち寄るのも面白い。

次いでに、ソメイヨシノが咲き乱れる4月初旬の時期ならば、ぜひとも鉄道公園から御殿場線に沿った田屋敷・萩原周辺の散策がお勧めで、傍にある町営健康福祉センターの「さくらの湯」を利用されるのも温泉好きの方々には一興である。なお、萩原先の樋口橋付近は、江戸時代に宝永火山灰の流失氾濫対策として皆瀬川を掘り割って酒匂川に合流させた苦労話を偲ばれ、用水整備に関しては皆瀬川の川入堰、酒匂川の瀬戸堰の遺構も残されている。

共和地区の皆瀬川上流域には、県指定天然記念物の「高杉のウラジログシ」や県指定重要文化財（工芸品）の鰐口があった薬師堂、さらに国指定重要無形民俗文化財である「お峰入り」が奉納される神明社もあるが、かなりの健脚でない人にかぎり車の利用をすすめたい。

堀割の西側一帯の台地区には、江戸時代箱根の裏関所として「川村関所」が置かれ、酒匂川対岸の古道を押さえる「谷ヶ関所」とともに重要な施設であったが、今は説明板を立てて注意をうながしている。川村関所から清水・三保地区へは、かながわの古道50選「奥山家古道」が通じており、乳牛育成牧場がある大野山へのハイキングコース

とともに史跡や道祖神を見ながら気軽に歩けるところである。途中、神奈川県立歴史博物館に所蔵されている鎌倉時代後期の和鏡5面が出土した「梵天山」を左手に見ながら、都夫良野の「鐘ヶ塚砦」や「地藏堂」、「頼朝桜」を経て、湯蝕・大蔵野の「須賀神社」に至るルートが最もポピュラーなものとして推奨できる。

清水地区では川西の「新城跡」がある。尾根伝いに静岡県小山町方面に抜ける「御厨街道」を取り込んだ山城で、武田信玄や勝頼らに落城させられた記録があり、豊臣秀吉の小田原攻め（1590）では徳川家康の率いる甲州勢によって雑兵31人が討ち取られたことでも知られている。頂上にある櫓台跡の試掘調査では、写4のように北側緩斜面から道路状遺構とともに畝堀の存在が確認されている。現在は茶畑や山林になっているが、農道を登りつめると小山町から御殿場市のいわゆる御厨地方の眺望がみごとに開けるところである。

酒匂川の対岸には谷ヶ地区があり、谷ヶ関所跡や源氏に由来を求めるといふ白旗神社、さらに西



写5 丹沢湖遠景（丹沢湖記念館・三保の家他）

側の箱根に連なる尾根に沿って鳥屋砦、三十三間堀、丹土尾砦、阿弥陀尾砦、小首尾砦から足柄峠に造られた足柄城へと続いて行くが、県境の道なき道を踏破しなければならず、一般の人を案内することは絶対にさけるのが無難で、新城跡から往時を偲んで足柄城方向を眺めるのが正解である。

車で「道の駅山北」から丹沢湖方面に向かうと、神縄には県指定天然記念物になっている「頼政神社のトチノキ」があり、清龍寺の石造地藏菩薩座像は室町時代初期の作として注目されている。

三保地区へ足をのぼすと、かながわの景勝50選になる丹沢湖の畔には「丹沢湖記念館」や水没地区の民家を移築した「三保の家」がある。ここには、県指定重要文化財（考古資料）の「尾崎遺跡の石斧製作関連資料」も展示されており、縄文時代の交易品になった緑色凝灰岩による石斧製作工場であった尾崎遺跡の性格が理解できる。また、永歳橋を渡った大仏地区には城山の地名があり、中川温泉に至るまでには中川城跡や湯ノ澤城跡といった城砦群が戦国時代の喧騒を忘れて静かにたたずんでいる。

箒沢には、樹齢約2000年と言われる国指定天然記念物の「箒杉」があり、必見である。路線バスの終点となる西丹沢自然教室はキャンプや登山の拠点として、これからの新緑や山ツツジ、夏の清流遊び、秋の紅葉と枚挙に暇がない行楽が続く。最後に、ここまで来てしまえば温泉につかって帰るのが常識で、中川温泉にある町営「ぶなの湯」でゆったりと体を休めることをおすすめする。



写3 新城跡遠景（南東より）



写4 新城跡・櫓台跡と北側畝堀（山北町教育委員会提供）

小出川河川改修関連遺跡群・下寺尾七堂伽藍跡見学会に参加して 岡田千枝

平成17年3月5日、(財)かながわ考古学財団が調査を行なっている、小出川河川改修関連遺跡群「茅ヶ崎市 七堂伽藍跡遺跡・寒川町 No.76遺跡」と、茅ヶ崎市教育委員会が調査を進めている「下寺尾七堂伽藍跡 第8次調査」の合同見学会に初めて参加しました。当日は、3月に入ったとはいえ底冷えのする一日でしたが熱心な考古学ファンが大勢集まられていました。

集合場所で受付を済ませ、資料をいただいて待っていると、かながわ考古学財団、茅ヶ崎市教育委員会のそれぞれ担当者の方から調査の全体的な説明と見学上の注意事項のお話がありました。それからがいよいよ遺跡見学です。

かながわ考古学財団の調査の中では、J R付け替え地区と呼ばれている調査区から見つかった掘立柱建物の説明に興味を持ちました。遺跡の中には柱を立てた大きな穴がたくさんあって、同じ建物の柱の穴には見分けがつくように白く印がしてあり長方形に並ぶのが分かりました。実はこの建物は昨年の遺跡発表会で発表されたもので、パソコンを使って穴の写真から柱が延びてきて会場の中からどよめき起きた時の建物でした。

次に茅ヶ崎市教育委員会が調査されている調査区に移動して説明を受けました。こちらはかながわ考古学財団の調査区とはちょっと雰囲気違って、あまり掘っていないのです。火が使われて地面が赤くなっているのは分かりましたが、それぞれの説明をしていただいてもなかなかその姿を想像することは難しかったのが正直な感想です。しかしこれには訳があり、下寺尾七堂伽藍跡は茅ヶ崎市の重要な遺跡で、後世に残すことを前提に調べているからだそうです。調査をすると遺跡が壊れてしまい、調査をしないと情報が得られないという、相反する状況の中で慎重に作業を進めていかなければならないご苦労が見学会に参加してよく分かりました。調査によって出土した遺物はどれも貴重なものばかりで、銅の匙や上薬を塗ったきれいな焼き物のかけらもとても魅力的でした。

見学が終わって駅に向かう途中、小出川に架かる

橋の上から振り返ると、当時は七堂伽藍や奥の丘の上には高座郡衙の建物がきらびやかな姿で見たのだらうなと想像してしばし佇んでから帰路につきました。

新刊紹介



坂本 彰 著

「鶴見川流域の考古学」

—最古の縄文土器や謎の中世城館にいどむ—

百水社発行／星雲社発売

A5版 192頁

2005年1月20日発行

定価1,500円＋税

「横浜の北部を流れる鶴見川の流域は、古くから“都筑”とよばれる地域的まとまりを成してきた。…半世紀前までは緑したたる雑木林と水田の農村地帯であったが、今日では一面の住宅地へと変貌した。ここに全国各地から多くの人に移り住み、“第二・第三のふるさと”となりつつある。ところがこの地はまた、先人の暮らしの跡がよく保存されている『遺跡の宝庫』であった。」… 後書より

著者の坂本さんはこれまで30年以上にわたり、都筑の遺跡を調査されてきましたし、また現在も活躍中です。そしてその活動の大半は港北ニュータウン埋蔵文化財調査団の調査員としての調査でした。本書は、この調査成果をもとに都筑を一つの地域史としてまとめられたものです。

考古学の入門書として広く一般の皆さんに推薦できると共に「遺跡群研究」の目的意識が随所に表れる本書は、研究者の方々にもぜひ一読されることをお勧めしたいと思います。(渡辺 務)

問合せ先 星雲社 03-3947-1021

考古かながわ 第32号

発行 神奈川県考古学会

発行日 2005年3月31日

編集者 秋田かな子・安藤文一・
河野真知郎・渡辺 務

印刷 (有)湘南グッド

発行者 神奈川県考古学会会長 寺田兼方
〒251-0043

藤沢市辻堂元町4-17-4 やよい荘102
郵便振替 00240-9-71208